

北街道の再興に向けた周辺エリアの分析

静岡理工科大学理工学部建築学科

教員： 准教授 田井幹夫

参加学生： 学部3年 白瀧昌、鈴木隆弘、古川竜翔、波多野日葉里
学部4年 鈴木里々花、稲葉洋人、森下空々、牧田実夕、中川照之、藤田亮太郎
大学院1年 滝内裕大、高木淑彬、松橋求道
大学院2年 有田晃己、田中葵、疋田大智、鬼頭拓巳

1. 要約

本研究の体制は、2022年9月に静岡市市民文化会館大規模改修の基本設計着手をきっかけに、計画のプロセスにリサーチの手法が必要と考え、大学研究室と設計者が協同する目的から始まった。文化芸術は日常であり、新しい会館は市民の創造活動の拠点となること、施設だけでなく周辺エリアに賑わいを創出することが求められた。これに対して市民文化会館を利用する静岡市内外の市民団体やアーティストにヒアリングを行い、課題とニーズを集め、ソフトとハードを整理して可視化することを経て、設計に展開した。

続く2023年度、研究の対象を市民文化会館と人流の近接性がある北街道エリア、さらに静岡市市街地全体に広げ、基礎的なリサーチとして街歩きを実施するほか、専門家からのレクチャーや文献調査により地域の地形や自然生態、町割り近代化、生業や文化活動の歴史等を紐解き、産業、そこに働く人々など様々な角度で分析し調査をまとめた。また、街歩きなどで発見した、建築とアートを提案する可能性のある場所についてはワークショップ形式で議論を重ね、各所に今後のまちづくりを牽引していく建築・装置または活動をデザインして提案することで、今後のまちづくりに対しての調査から提案まで一貫した手法を提示した。

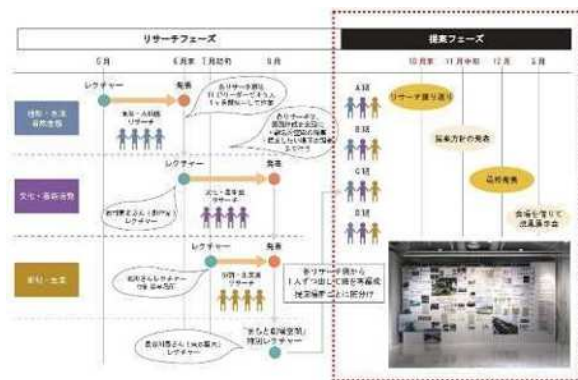
2. 目的

静岡市の中心市街地は人口減少、沿道建物の老朽化、消費のあり方の変容等によって、かつての賑わいと比較すると停滞の傾向にある。例えば北街道エリアにおいて、静岡市が計画している北街道の道路整備や市民文化会館の再整備事業といった事業を進めるにあたっては、周辺エリアを一体と捉え、課題把握と提案的視点から将来のあるべき姿を描く。エリアの特性から静岡市の掲げる「まちは劇場」との関連性を積極的に考え、実践的な取組みを提案することを目指す。

3. 研究の内容

研究の進め方を「リサーチフェーズ」と「提案フェーズ」の2段階に分けた。リサーチフェーズの初めに、4つの専門性についてレクチャーを行い、リサーチの予備知識を参加者が共有した。リサーチは下記の3つのテーマに分かれ、提案フェーズはリサーチのグループメンバーをランダムに組み

直して4つの提案を行った。提案の成果は「4. 研究の成果」に示す。



【レクチャー】

- 5月18日「デザイン作業に向けて鳥の目（環境）の情報を集める」 講師：久保田貴大（鳳コンサルタント）
 6月26日「町割りの歴史と防火帯建築」 講師：北川言（針谷建築事務所）
 7月6日「劇場が日常になる、日常が劇場になる」 講師：石神夏希（劇作家）
 8月8日「空間と政治 都市空間はどのように使われてきたのか」 講師：長谷川香（東京藝術大学）



【リサーチ】

3-1. 地形・水脈・自然生態に関する調査

城下町建設の課題として安倍川の流れをコントロールする必要があった。この治水事業は今川時代に始まり、本格的な整備は徳川家康による。駿府城への給水、町方用水、農業用水が主な目的だった。現在は上下水道の整備により駿府用水の役割は終えている。大部分は暗渠となっているが、用水の経路を水上から水下へと辿ると駿府城をとりまく周辺地盤の高低差を知ることができる。御幸通に沿って警察署・市役所の前には用水の一部が確認でき、ここに親水空間や環境装置を提案する可能性を感じた。北街道を横内川が流れている過去の写真からは、当時の町人の生活が感じられた。

3-2. 町割り・生業に関する調査

市中心市街地の街区の変遷を文献（地図）資料から読み解いた。江戸時代には「せり」と「会所」を持つ約50m角の街区であったが、近代化の過程で背割道路が計画され、コミュニティや通りの個性が希薄化したと考えられる。また静岡大火等の経験から防火帯建築が建築され、現代の紺屋町・呉服町の景観に至る。

静岡市の産業・生業を調べる中で、特に茶産業とまちの形成に着目した。お茶の生産から販売までの業者が茶町界限に賑わい、多くの町名に運送ルートの名残がある。現代にも通じる代表的な産業で

あり、マップの作成やお茶ツーリズムに興味を感じた。同じくプラモデル産業も静岡の職工からの発展と考えられ、海外にも販売が促進されている。ものづくりをテーマにしたまちの活性化に可能性を感じた。

3-3. 文化・芸術に関する調査

静岡市内で文化芸術活動を行っている団体や個人にヒアリングとアンケート調査を行った。劇場のスペックやキャパシティについての意見や、ストリートピアノの是非、今後に要望するものなどの情報を収集した。

静岡市が指定する10か所の「まち劇スポット」は、街角に大道芸や演劇、パフォーミングアーツなど様々なジャンルの芸術が生み出される機会を創出している。静岡駅北口地下広場（しずチカ）や札ノ辻交差点なども、同様の場所として認知されている。一般店舗においても音楽家やクリエイターが集い、演じ、楽しむ場が散在することを知ることができた。その結果をアマチュアアーティストの練習の場、発表の場、まち劇スポット、プロの発表の場に分けて静岡市の地図にプロットし、その傾向や今後の「場」づくりの可能性を探った。

4. 研究の成果

リサーチフェーズを経て、市街地各所への4つの建築的提案を行うことを成果としてまとめた。

4-1. A班『MACHIGEKI-BOX』

市民が日常的に習い事を発表したり文化芸術を発信したりする場所の少なさに着目。江戸時代の職人から引継がれた家具の生産地としての強みを生かす。家具のスケールで「まちは劇場」を考え、仕掛けの一つとしてスピーカーや照明を組込んだBOXを制作し、街なかに散在させる。ストリートファニチャーとして、舞台装置として、BOXの組合せによる機能拡張を可能とする。設置場所の案は、しずチカ、小櫛神社（まち劇スポット）、駿府町いこいの広場など。



4-2. B班『静岡市の魅力を掘り起こす～過去と現在をつなぐアルミパイプ～』

静岡市を代表する産業の一つである「アルミ」について、その物質的特性を理解しながら、建築的な提案によって、場所に付随する体験を通して魅力を伝える。設置場所は、安倍川公園、薩摩土手、賤機山など様々な可能性を持ち、離れた場所でも共通の素材とデザインで提案としての関連性を感じさせる。呉服町や北街道では商業店舗の前にベンチや情報発信の機能を持たせ、交流をデザインする。また自転車の駐輪を誘導したり、商店街の一店逸品運動との連動性もコンセプトに含む。



4-3. C班『北街道商店街をものづくりエリアに』

徳川時代の伝統工芸が製造業に繋がった静岡市の生業の歴史、例えばプラモデル産業の発展などが興味深い。中心市街地から郊外へと製造の場が移り空洞化した現状を捉え、市民のものづくりへの関心を商店街の活性化に再び利用する手法を考えた。ここでは北街道商店街を題材に、空き店舗をものづくりスペースに活用、伝統工芸の職人やアーティストが交流する工房・アトリエの誘致、アーケード（歩道）と店舗をつなぐ什器や建具のデザインなど、L・M・Sのスケールで商店街に変化を生み出し、かつて町人や旅人が行き交ったような活気を取り戻す。



4-4. D班『水上舞台』

徳川家康の駿府城築城は広域的な治水事業を伴い、現在も残る用水や水資源の豊かさに通じる。大道芸ワールドカップや文化芸術活動の発表の場を増やす方法の一つとして、水資源を用いた「水上舞台」を提案する。デザインの形態は、現在駿府城内堀を運航している「葵舟」を活用し、駿河竹千筋細工や駿河和染などの伝統工芸を取り込む。内堀の水面と歩行者の高さ関係が、演者と観客の新しい関係性、新しい風景を生み出す。



参考：2022年7月～2023年3月の研究成果 アーティストや団体へのヒアリング調査



5. 地域への提言・地域からの評価

本研究の成果を市民の皆様に発表する機会を設けることとした。3月7日～10日の4日間、提案内容に沿って展示場所を複数設定した（静岡駅北口地下、紺屋町小梳神社前（まち劇スポット）、駿府ホリノテラスなど）。また、北街道商店街の空き店舗をメイン会場として借用し、展示計画を行った。会場選定、広報等を通じて地域の方々に研究の意図を伝えるコミュニケーションもまちづくりへの参加と言える。さらに、同期間に開催されるパフォーミングアーツイベント（静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター主催）と一部協同し、街なかでアートと提案提示が同時に発表される。関連してシンポジウムを企画し、「誰もが演者になるまち」をテーマに議論を展開する。

地域からの評価はこの成果発表の後に様々な意見が寄せられることに期待するが、誰もがまちづくりに参加できる意識の共有と、リサーチから提案への手順が、地域の共感を得てデザインする最適な手法であればと願い、継続的な活動を目指したい。

幼児向け環境学習プログラムの開発と実践

静岡福祉大学 子ども学部 坂田ゼミ（研究室）

教 員：教授 坂田尚子

参加学生：杉本祥太郎、 齋川蒼斗、村木裕一、丸山葵、
柴崎透馬

1 要約

こども園において、日常行われている自然とのかかわりを持つ活動において、環境教育や生物多様性の観点を取り入れた活動プログラムを作ることで、子どもたちの体験をより豊かなものへと変換できないか模索した。園周辺での活動を取り入れることで、日常的により多くの体験を保障できることが明らかとなった。また、プログラムを開発・実践する過程で、子どもたちばかりでなく、保育教諭・保育士への自然物に対する興味などが深められ、結果として環境への関心も深められた。

2 研究の目的

近年子育て世帯の家庭状況の変化などから、自然と親しむ機会が減ったり、親子で自然体験教室等への参加が難しかったりして、自然と触れ合うことが苦手な保護者や子どもたちがいることが報告されている。幼児期に自然に触れあう体験や機会を多く保障し、自然を大切にする心を育むために、幼児教育における自然と親しむ活動の役割はますます大きくなっていると考えられる。しかし、幼児教育を担うこども園などでは、周辺の豊かな自然環境にたやすくアクセスできているところは多くはない。

そこで、様々な環境背景のあるこども園等の集団保育教育の場において、大学教員と学生が保育教諭・保育士とともに子どもたちと実際に活動を行いながら、豊かな自然体験を保障し、実現可能で持続可能な環境教育、生物多様性教育のプログラム開発を協働的に行うことを目的とした。まずは、いくつかの協力園を募り、園に小さな自然を取り込んで生き物と呼ぶ仕組みづくりや、日常的な園外への散歩を自然観察として位置付けること、身近な生き物の飼育・栽培などから子どもの気づきを引き出す機会を増やすプログラムを開発・実践していくことを目指した。プログラム開発後、広く情報を開示し、興味のある園、保育者に共有していくことで、持続可能な環境教育の活動が幼児教育の場に広がっていくことを模索する。

3 研究の内容

令和元年に静岡市が実施した環境教育・環境保全活動に関するアンケートにおいて、幼稚園・保育所・認定こども園から9割以上の園で環境教育を実施しているものの、「専門的知識を持つ教員の不足」や「教員に時間がない」という回答が多く寄せられた。これを受けて、幼稚園・保育所・認定こども園等集団保育・教育の場で行われる、日常的な自然との触れ合いの中での活動を「学び」の場にかえて、保育教諭・保育者が環境教育、生物多様性の視点を明確に持つことが出来れば、より効果的な環境教育の実践、生物多様性の認識につながると考えた。本研究では、市内のこども園五園が参加し、保育教諭・保育士とともに、各園のニーズに合わせた子どもたちや周辺環境に適した活動のプログラムを開発し、実践し、振り返り・検討をすることを経てより良い活動プログラムの構築を目指した。最終的に得られた知見、活動のアイデアなどを静岡市からの「通信」という形で、広く市内の園に周知する準備ができた。

プログラム開発の枠組みとしては、◇年齢に合わせた内容（3～5歳児）◇園庭、園周辺の公園等の場所や季節に合わせた内容 ◇活動・学習プログラムの中に生物多様性維持、周辺環境の保全の視点を入れるということを設定した。

参加園は、静岡市立横砂こども園、静岡市立安倍口こども園、社会福祉法人あゆみ福祉会 竜南こども

園、静岡市立西奈こども園、静岡市立富士見台こども園の5園である。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

	時期	内容
①	8月～9月	・研究計画の細案策定と参加園の選定
②	10月	・静岡市担当者との研究実践についての工程など詳細打ち合わせ ・参加園へのご挨拶と打ち合わせ日程の相談
③	11月	・打ち合わせ；担当教諭・保育士への研究内容の説明と実践日程の決定
④	12月～2月	・各園での実践
⑤	3月	・研究結果のまとめと研究成果の検討、考察

(2) 実際の内容（Aは予定どおり、Bは一部修正、Cは中止など）とその理由

	時期	内容	判定	理由
①	8月～9月	・研究計画の細案策定と参加園の選定	A	予定通りに終了
②	10月	・静岡市担当者との研究実践についての工程など詳細打ち合わせ ・参加園へのご挨拶と打ち合わせ日程の相談	A	10/4に静岡市担当者との打ち合わせを行った後、参加園への連絡を取り、研究内容の説明のための打ち合わせ日を決定した
③	11月	・打ち合わせ；担当教諭・保育士への研究内容の説明と実践日程の決定	B	11/6 13：30～横砂こども園 11/7 13：30～富士見台こども園 11/14 14：30～西奈こども園 11/27 11：00～竜南こども園（活動終了後）
④	12月～2月	・各園での実践（2回～3回）	A	横砂こども園 12/15（荒天中止）1/10、2/15 富士見台こども園 1/29（3/13） 西奈こども園 12/7、1/30、2/27 安倍口こども園 12/5、12/18、1/29（3/12） 竜南こども園 11/27、1/31、2/26
⑤	3月	・研究結果のまとめと研究成果の検討、考察	A	各園での振り返り、来年度へ向けての要望調査と報告書作成を行った

(3) 実績・成果と課題

各園のニーズや状況に合わせた、保育教諭・保育士を巻き込んだプログラム作りをする計画通り、横砂こども園では「庵原川の河口に行ってみよう」「庵原川を海からさかのぼろう」、安倍口こども園では「何があるかな観察しようー神社」「何があるかな観察しようーお山とトンネル」竜南こども園では「ビオトープの観察ー冬」「雨坪公園に春を見つけに行こう」、西奈こども園では「地域のお宝発見さんぽー長尾川コース」「地域のお宝発見さんぽー弁天池コース」「地域のお宝発見さんぽー梶原山

コース」など、保育教諭・保育士、ともに下見や教材研究を経たうえで、園に適したプログラムを作ることができた。これらの活動をとおして、子どもたちがいろいろな事象に気づき、言葉で表現する姿がたびたび見られた。自然を見る活動を複数回行うことで変化に対する気づきが促進されているのを見ることができた。

富士見台こども園は、園庭の整備の際に自然豊かな里山を取り込む工夫をするために、園庭のデザインと子どもたちの活動とのかかわりなどを盛り込んだ研究計画を設計し実行に移している。子どもたちが土を盛った築山を作ったり、植物を植えたりする予定である。



横砂こども園

↑ 庵原川の河口



↑ 庵原川をさかのぼろう



安倍口こども園

↑ 神社入口



↑ ドングリの鑑定



竜南こども園

↑ ビオトープの観察



↑ 公園での活動



西奈こども園 ↑ 赤い実見つけた



↑ 春さがし



富士見台こども園

←

園庭にて

タイヤを土台に

築山づくり

本研究における各園での実践では、野外での活動や観察の手法について、様々な工夫などを見出すことができ、プログラム作りにおいて保育教諭・保育士が生き物により興味をもてたことは一応の成果と考えるが、研究の時期が、自然が生き生きとし生き物が活発に活動する春から夏にかけてではないので、一年を通じた自然とのかかわりを目指すためには、研究成果として不十分だったように思う。

(4) 今後の改善点や対策

今後の改善点としては、自然体験活動を多くとりいれた経験のある園では、研究開始がスムーズだったが、今回から研究に参加した園では、準備に長い時間がかかってしまった。各園における経験をもとに、あらかじめ研究体制の構築を整えることがあげられる。また、季節のつながりを意識して、今後も継続して季節ごとのプログラム開発に取り組むべきだと考える。

5 地域への提言

子どもたちが豊かな自然体験を得ることで、環境への気づきも増えていくと思われるので、今後もこれらのプログラムを作る過程で、保育教諭や保育士たちが工夫したこと、活動の際に見つけた自然などの情報は今後広く他の園へ周知し、自然を対象とした活動をする際に参考にさせていただけることを期待する。春から夏にかけて研究を続けられるよう配慮をお願いしたい。

6 地域からの評価

今回は、地域からの評価を判断するデータを取っていないため断言できないが、子どもたちが園周辺で、自然に着目した活動をすることで、行き交う大人たちも一緒になって自然に目を向けてくれていたようだ。「子どもたちが動くと地域がうごく」と感じるので、その点を次回の研究では明らかにしたい。

「人口減少の克服及び地域の活性化に向けて」に関する研究

大 学：関東学院大学法学部 牧瀬稔ゼミナール（地域創生ゼミナール）

教 員：教授 牧瀬稔

参加学生：阿部風花、勝又汐那、光永愛美、箭田川椋大、山本航瑛、我妻友彩、二階堂琴音、上西尚斗、遠藤晴叶、大矢寛之、加藤桃香、川名佳祐、嶋崎広大、須澤泰斗、関野友雅、高橋もあな、田中悠太、宮田優衣（学籍番号順、合計18名）

1 要約

本研究の大きなテーマを「人口減少の克服及び地域の活性化に向けて」とし、具体的に4課題を設定した。4課題は、①農業を魅力ある職業とアピールし、若い世代の新規就農者の増加（農政課）、②新卒年代の移住定住（UJIターン）を達成するための事業展開（誘致戦略課）、③外国にルーツを持つ市民と日本人市民の相互理解を深める手法（市民協働課）、④若者で賑わう駅前通り商店街の新しいカタチの構築（商工観光課）、である。

4課題を解決するために、研究手法として、①文献調査（webと新聞記事を含む）、②ヒアリング調査、③現地調査、④ゼミナールにおける意見交換、を実施した。

最終的には、それぞれの課題を解決するため政策案を提示し、中野弘道・焼津市長をはじめ幹部職員、担当課に対してプレゼンテーションを行った。なお、来年度以降は、焼津市と協議し提案した政策案をゼミナールとして具体的に実行に移したいと考えている。

2 研究の目的

焼津市を襲う一つの大きな課題として、人口減少の進展と地域の衰退がある。今回、焼津市をフィールドに研究を進めるにあたり、同市と協議した結果「人口減少の克服及び地域の活性化に向けて」を基本テーマとして、研究を進めることとなった。

さらに、焼津市と調整した結果、4つの個別具体的な課題を設定した。それは、①農業を魅力ある職業とアピールし、若い世代の新規就農者の増加（農政課）、②新卒年代の移住定住（UJIターン）を達成するための事業展開（誘致戦略課）、③外国にルーツを持つ市民と日本人市民の相互理解を深める手法（市民協働課）、④若者で賑わう駅前通り商店街の新しいカタチの構築（商工観光課）、である。これらの4課題は「焼津未来総合戦略」（地方版総合戦略）の中でも明記されている。

本研究の目的は、4つの個別具体的な課題を解決するために、政策案（施策案・事業案を含む）を提示することにある。特に、大学生が持つよそ者・わか者・ばか者の3視点から政策案を提起していく（ばか者は本当に「バカ」という意味ではなく、想像しない新しい提言をするという意味での「ばか者」である）。ゼミナールに所属する18名の大学生を4チームに分け、焼津市の担当課の協力をいただきながら、研究を進めた。最終的に中野弘道・焼津市長に政策提言をすることも、重要な目的である。

3 研究の内容

4つの課題を解決する政策案を提示するために、大学生（各チーム）は次の研究手法を採用した。それは、①文献調査（webと新聞記事を含む）、②ヒアリング調査、③現地調査、④ゼミナールにおける意見交換、である。

最初に文献調査を実施した。各チームが担当する課題に関して、他自治体の動向や焼津市の現状調査

等を各種資料から把握した。毎回ゼミナールにおいて、各チームから報告を行い、担当教員（牧瀬）からのコメントに加え、ゼミナール全体での意見交換を行った。そうすることにより、焼津市が抱える課題の背景が確認でき、課題を解決するための仮説を構築した。

次にヒアリング調査を実施した。各チームが抱く仮説が合致しているかどうかをヒアリング調査により確認した。ヒアリング調査は、担当課（担当職員）に対して行った（当初は8月15日・16日に実施する予定であったが、台風接近のため延期とした。その後、10月27日・28日に実施した）。仮説が合致している場合もあれば、仮説とは異なったケースも見られた。仮説が異なる場合は、再度、文献調査等による情報収集を行い、仮説を再構築した。対面のヒアリング調査だけではなく、各チームと焼津市の担当課の間で、メール等のやりとりが続くことになる。

また、現地調査も行った（写真1）。現地調査の訪問先はチームにより異なるが、焼津駅前通り商店街、焼津さかなセンター、深層水ミュージアム、親水公園ふいしゅーな、焼津市歴史民俗資料館、焼津市観光協会等である。

焼津駅前通り商店街では、商店街を訪れる消費者にヒアリング調査を行い、来訪者の行動パターンや人数の把握等を実施した。焼津さかなセンターでは、従業員へのヒアリング調査も実施している。各チームとも、焼津市の魅力の再発見や、人口減少や地域が衰退する理由の把握に努めた。

写真1 現地調査の様子



「①農業を魅力ある職業とアピールし、若い世代の新規就農者の増加」の現地調査の様子



「④若者で賑わう駅前通り商店街の新しいカタチの構築」の現地調査の様子

研究だけでは課題は解決しない（机上の学問では意味がない）。実際に政策案として結実し、政策を実施してこそ、課題は縮小し解決していく。ヒアリング調査や現地調査により得た知見を考察し、課題解決に向けて、望ましい政策案を検討した。日々のゼミナールにおいて、各チームが政策案を発表した。提示された政策案に関して、ゼミナールにおいて意見交換を行い、実効性のある政策案へとレベルアップを図った。

最終的には中野弘道・焼津市長に対して政策提言を行った。中野市長の講評では、「現状を正しく分析し、課題の解決方法が明確である。若い視点をずらさずに、政策が考えられているため、内容が新鮮で、考え方がフレッシュな印象を持った。そして、学生が書いた絵やポスターが素晴らしい」（趣旨）など、高い評価をいただいた。なお、ゼミナールとしては、政策提言を行い終了するつもりはない。今後は、焼津市と協議し、提案した政策案が採用された場合は、引き続きゼミナールとして政策の実施（推進）に関わっていく予定である。

4 研究の成果

(1)当初の計画

台風のため、担当課へのヒアリング調査や現地調査の日程が変更となったが（8月から10月に変更）、おおむね計画どおりに実施できた。

(2)実際の内容

当初予定していた研究は予定とおり実施できたため「A」である。

(3)実績・成果と課題

「3 研究の内容」でも言及したが、各チームが提言した政策案に関しては、中野市長からお褒めの言葉をいただいている。また、4 課題を提示した各担当課からも評価を得ている。これらが実績であり、成果でもある（研究の成果であり、事業実施の成果ではない。事業は今後実施したい）。

中野市長等へのプレゼンテーションに関しては、静岡新聞や地元ケーブルテレビのニュース等においても報道された。これも一つの成果と捉えている（無意味なプレゼンテーションである場合は、報道されないを考える）。

写真2 プレゼンテーションの様子等



中野市長等に対するプレゼンテーションの様子



中野市長から感謝状をいただきました

(4)今後の改善点や対策

日々のゼミナールの意見交換において「アンケート調査を実施すべき」という意見があった。しかし時間の関係や費用等の理由により、アンケート調査は実施しなかった。より実効性のある政策案にしていくためにはアンケート調査を実施することも必要かもしれない（これは改善点である）。ちなみに、アンケート調査は行わなかったが、焼津市が実施している、市民等を対象とした各種アンケート調査結果を参考にして政策案の構築に取り組んだ。

何度か言及しているが、「政策案を提示して終了」は焼津市にとっても、現地調査を実施した地域にとっても失礼である（地域をかき乱しただけである）。来年度は、提示した政策案を焼津市の協力のもと実行に移していきたい。

5 地域への提言

各チームの提言を簡単に言及する（かなり簡単に言及するため、詳細は提言集をご覧ください）。

①農業を魅力ある職業とアピールし、若い世代の新規就農者の増加（農政課）

農業の魅力が若い世代に伝わっていない現状がある。そこで焼津市全体で農作物にありがたみを感じ、農業に親しみを持つ2日間として「焼津農業 DAY」を提言している。具体的には田植えイベント等の開催である。

また「農カード」を用意し、配付することも提案している。農カードとは、全国140の農業関係

者が参加し、農業を盛り上げ、消費者に安心して買ってもらうためのツールとして注目されている。そのほか、農業の魅力をアピールし新規就農者の増加のための政策案を提示している。

②新卒年代の移住定住（UJI ターン）を達成するための事業展開（誘致戦略課）

大きく「焼津ステップ」と「マンガビレッジ」を提言している。前者の焼津ステップとは、高校生、大学生を対象にした短期留学である。実際に焼津市にお試しで住んでみる取組である。焼津での仕事体験を通して、同地域で働くことの魅力を感じることが主眼である。なお、宿泊場所は「中野市長及び幹部の方の家（晩酌付き）」とした。

後者のマンガビレッジとは、「マンガ」をキーワードに移住定住を進めることを意図している。焼津市には漫画家の瀬戸口みづき氏がいる。同氏の協力を得て進めることが理想である。他自治体には芸術家のビレッジ構想はあるが、マンガに特化した事業はない。そこで焼津市で実施する意義を強調した（全国初になるかもしれない）。

③外国にルーツを持つ市民と日本人市民の相互理解を深める手法（市民協働課）

焼津市が「思いやれる、思いやられるまちの実現」するために、外国人ではなく、日本人を対象とした政策案を提起している。具体的には日本人の相互理解に対する意識改革が最優先と考える。例えば「ワールド・カフェ」の開催による日本人の共生意識の醸成や焼津市が「思いやり宣言」を出すことにより、市全体で取組むことの重要性を提示している。また「思いやれる、思いやられるまち」を実現するため、ポスター（シンボル）の制作も提言している。

④若者で賑わう駅前通り商店街の新しいカタチの構築（商工観光課）

提言の一つは「小学生による商店街ポスターの作成～小展街コンテスト～」である。子育て世代を商店街に誘導する一つの契機となる。もう一つの提言は「駐車スペースにキッチンカーを設置～キッチンストリート～」である。現在の商店街は、昼間に開いている店舗が少ない。そこでキッチンカーを集中することにより、賑わい創出を実現する（キッチンカーによる賑わい創出がでてきた事例は多い）。続いて「駅前通り商店街でクイズラリー～魚Q（ウォーク）ラリー～」を提言した。ターントクル子ども館に一定の来場者がいるものの商店街に来ない。また子育て世帯が多い。そこで、子ども向けのクイズラリーを実施することで、駅前通り商店街に誘導を考えた。

以上「人口減少の克服及び地域の活性化に向けて」を克服するため、4課題に対して具体的な政策案を提示した。これらの政策案を進めることにより、焼津創生が前進すると考える。

6 地域からの評価

中野市長や担当課からは評価を得ている。地域（現地調査先等）の評価は厳密には把握していない。チームの中には政策提言の御礼を兼ねて、再度、現地を訪問している。その際、地域の感想は好評だった。可能ならば、次年度は、政策を推進することで地域に恩返しをしたい。

最後になりますが、本研究を進めるにあたり、中野市長をはじめ、担当課の皆様、地域の皆様に感謝申し上げます。引き続き焼津創生のため政策を推進していきたいと考えています。

令和5年度
しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業
研究成果報告書

令和6(2024)年4月
しずおか中部連携中枢都市圏
(静岡市・島田市・焼津市・藤枝市・牧之原市・吉田町・川根本町)

(事務局)
静岡市 総合政策局 企画課 総合教育係
〒420-8602 静岡市葵区追手町5番1号
電話：054-221-1240 FAX：054-221-1295
E-Mail：kikaku@city.shizuoka.lg.jp